

---

# 怨情

勝目博

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怨情

### 【Nコード】

N7961D

### 【作者名】

勝目博

### 【あらすじ】

夢の美大に進学した弘子。その弘子に迫る甘い罠……。

## 序章

### 序章

—

弘子の日課は朝の入浴から始まった。温めの湯で、ゆっくりとした至福の時間を過ごす。

最後は、なみなみと湯を満たした浴槽に頭まで沈み込み、息が続くまで数を数え、

一気に立ち上がる。髪の毛から、そして全身からしたたる水滴に意識を集中するのだ。

全身がくすぐられているようで不思議な感覚を体験できる。

厳格な父に育てられた一人娘が、一人の生活を始めて、やっと掴んだ自由だった。

本来ならば、地元の女子大にエスカレーター式に入学できたが、

弘子の願いは、美術大学に行く事だった。もちろん父は猛反対した。今さら苦勞する必要はないと、思っていたからだ。しかし、弘子は諦めなかった。

このとき初めて弘子は父に反抗した。初めて反抗された父の怒りは凄まじかったが、

同時に弘子の固い決心も確実に伝わっていた。

結局は父が折れ、美大の受験に同意してくれた。

父は、弘子を受かるとは思っていなかったのだ。自分の家系にも、弘子の母の家系にも、芸術家は一人もない。ところが弘子は見事に合格した。

しかも、かなりの成績を収めたようだ。父は戸惑ったが、約束を交わした以上反故には出来ず、弘子が東京の美大に行くことを洪々了解した。

弘子は念願の美大生になれたことを心から喜び、卒業したら必ず帰ると、

父と約束を交わし東京に旅立った。しかし、その約束が守られることは、永遠に無かった。

弘子が美大生になって二年が過ぎようとしていた。専攻は油絵とデッサンである。

きりりと引き締まった眉は、被写体に視線が注がれるたびに優しく持ち上がる。

二重まぶたは深く切り込み、やや切れ長の目を形度っていた。

鼻はあまり高くは無いが、真っ直ぐに筋が通り、小鼻は小さく適度なふくらみを持っていた。唇は上部がやや上向き、口紅が無くても色気が漂っていた。要は美人なのである。

しかし、弘子にはそんな自覚が無かった。自分が美人だとは考えたことも無いのだ。

地方の女子高だったこともあり、ボーイフレンドが出来たこともなく、

まして男と付き合う気もなかった。今は男より絵に夢中だった。

いつもジーンズにTシャツ。その上ノーメイクだ。

だから、普通の女子大生みたいに化粧が濃いとかが、

服装が派手だとの批判を浴びたことは一度も無かった。

男子生徒、女子生徒どちらにも人気があったのだ。

弘子は、やっと掴んだ美大生の生活を、弘子なりに楽しんでいた。

男と遊ぶつもりで入学したわけではない。勉強だけが望みだったのだ。

絵が描ければそれだけで幸せだった。

## 1章（1）

### 1章（1）

ところが、絵だけに集中する訳にはいかなかった。

同じデッサンの学ぶ友達に無理やり誘われ、パーティーに出席したのだ。

しかも友人に無理やり派手なドレスを着せられての出席だった。

その友達は、ただ単に、自慢目的のために弘子連れだしたのだ。

何故ならば、弘子は皆に人気があるくせに、有志の集まりなどには顔を出したことはない。

誰が誘っても断り続けていたのだ。皆が酒を飲み、男とおしゃべりしている時間も、

弘子は一人、黙々と絵の制作に没頭していた。弘子は絵が好きだった。

子供の頃から見るのも描くのも好きだった。弘子の実家は旧家でも指折りの資産家で、

家も広く廊下など、至る所に絵画が飾ってあった。

その中でも一番のお気に入り、弘子が幼い頃に病死した母の肖像画で、楽しい出来事や、

悲しい出来事全てを、絵の中の母に報告していたのだ。

その母は、今にも踊りだしそうなほど、躍動感に満ち溢れていた。

そして、自分もいつかこんな絵が描けるようになりたいなと、思っていたのだ。

弘子はパーティーを楽しんではいなかった。

子供の頃は実家でも良くパーティーが開かれたが、弘子にしてみれば、

疲れるだけの苦痛な時間でしかなかった。社交ダンスは父に教わった。

厳しい父だがダンスの時だけは、優しく弘子をリードしてくれたが、他のお客とのダンスは好きになれなかった。汗ばむ手で触られ、酒臭い息を嗅ぐと目眩すら覚えた。いまだに踊りは嫌いな上に、お酒も飲めないのである。

しかし、ただ座って退屈そうにする弘子でも、

幼い時からのパーティーマナーは身体に染み付き、注目を集めないどころか、

羨望の眼差しを集めていた。

背筋はしゃんとして伸び、僅かに斜に構え、片足の踵を少し後ろに引く感じで、

足をそろえて座る。手は力を抜き、太もも辺りに重ねて静かに置いておく。

完璧なのだ。弘子は意識してやっている訳ではない。

父に教わり、長い月日に培われた教養なのだ。

しかし、それを冷ややかな眼差しで見える目もあった。

弘子連れ出した友人は、注目を浴びる弘子に嫉妬し始め、飲めないお酒を、

無理やり弘子に飲ませた。そのうち弘子は気分が悪くなり、意識を失った。

弘子が目覚めたのは、見知らぬ部屋のベッドの上だった。

そこには三人の男いたが、皆裸だった。見た顔ではない。

慌てた弘子は、自分も裸なのに気が付き驚愕した。

男たちは微かな笑いを浮かべていた。男の股間には弘子が初めて見るものが、

脈を打ってそそり立っていた。まだ酒の影響が残っているのか、

弘子は思うように動けなかった。頭も割れそうに痛い。シートで身体を隠すのが、

せめてもの抵抗だったが、三人の男にしてみれば、

そんなシートなど何の役にも立たなかった。かえって興奮させただけだった。

声を出す間もなくシーツをはがされ、一人の男が押し掛かってきた。二人は弘子の手足を押さえ、不気味笑っていた。男の息が弘子の耳にかかった。

激しい息使いは弘子の胸を圧迫した。そして、無理やり開かれた足の間に、

男の下半身が分け入った。おそらく男根であろう物が、弘子の秘部に押し当てられたが、

弘子にはどうすることも出来なかった。ぐっと目を瞑ったが、涙は止まらなかった。

その時ずっと、胸の圧迫感が取り除かれた。

見ると、押し掛かっていた男が、手足をバタつかせ、後ずさりしていた。

何が起こったのか咄嗟には判断できなかった。

しかし次の瞬間、その男が投げ飛ばされたのを見て、弘子は全てを悟った。

誰かが助けてくれたと。それが雄二との出会いだった。

残る二人は、雄二を見ると慌てて逃げに行った。

雄二は一年先輩で、パーティーの主催者グループの一人だった。

弘子のように目立つ存在ではないが、同学年の女子生徒には、

それなりに人気の有る生徒だった。それ以来、弘子の目は雄二を追い始めた。

今まで男の子にトキメキなど感じたことのない弘子だが、なれない化粧もするようになり、少々派手な服も、友達から借りるようになった。全ては雄二の関心を引くためだった。

パーティーに誘った友だちとは絶交した。弘子を犯す計画も、全て友達と思っていた女の策略だった。やがてその女は、周囲の非難を一身に受け、

自主的に退学していった。弘子は改めて自分の無知さを知り、勉強だけでは世間を渡れないと判断した。

と、同時に雄二に深く好意を寄せる自分に気が付いた。単なるトキ

メキではない。

弘子にとっては初めての恋だった。

弘子は恋を实らせるために、あらゆる努力を重ねた。純朴なのである。

よく言えば一途。悪く言えば猪突猛进なのだ。ところが、元々美人だった弘子は、

少しの努力でたちまち蝶へと変身した。皆からは高値の華に位置づけられた。

何ものも寄せ付けない気品さえ漂っていたのだ。学園のアイドル的存在となった弘子には、

言い寄る男はいなかった。いや、言い寄れなかった。それほど警備が厳重だったのだ。

弘子の知らないところで、親衛隊が発足し、弘子を守っていたのである。

弘子は自分に魅力がないと勘違いしていた。雄二の視線を感じるが、弘子が見ると慌てて視線をずらすのだ。無様な姿を見られ、

弘子は雄二に軽蔑されていると思い込んだ。

とうとうある夜、弘子は雄二のアパートに押しかけた。

嫌われていたとしても、自分の気持ちだけは、雄二に伝えておきたかったのだ。

弘子はその時、初めて雄二の気持ちを知り、親衛隊の存在も知らされた。

その夜、弘子は全てを雄二に捧げた。

初めての恋が実った、弘子には忘れることの出来ない夜となった。

やがて学園内でも雄二のことが噂となり、弘子はアイドルの座を引きずり下ろされた。

元々弘子が望んだことではない。かえって清々とした気分だった。

普通の大学生に戻り、恋に、勉強にと青春を謳歌していた。雄二との仲も順調に見えた。



## 1章(2)

### 1章(2)

ところが、交際を始めて半年もしない内に、雄二は弘子を持て余し始めた。

美人な上に頭がよく、真っ直ぐに自分に向き合う女に、雄二は恐怖すら抱くようになった。

弘子の一途な性格が、仇となったのだ。どんな時でも、弘子は相手の目を見て話す。

愛を囁く時も、些細な喧嘩のときも、じっと相手を見ながら話ののだ。その目が雄二には我慢できなかった。

愛を語る時には強要を、喧嘩の時には謝罪を求めるように見えたのだ。

やがて雄二は浮気を始めた。気の置けない楽な女との情事を楽しんだ。

弘子とのセックスに不満があるわけではない。問題はその後にあった。

何度も『愛しているわ』と聞かされると、雄二の気持ちが悪えてしまふのだ。

雄二は、快樂だけを求める女を好んで選び、単なるはけ口にしていった。

ところがそのはけ口が、弘子への不満のはけ口に変わり、弘子の悪口を言い始めた。

学園のアイドルから一転、怖い女になったのだ。しかもそれは、愛する雄二が広めたのだ。

雄二は浮気する度に「弘子は怖い」と繰り返していた。

その噂が弘子の耳に入るには、さほど長い時間はかからなかった。

弘子はショックのあまりに寝込んでしまった。弘子の休学は長期に

及んだ。

一ヶ月もすると、さすがに責任を感じたのか、何度も雄二が訪ねてきた。

しかし、弘子は雄二と会わなかった。

自分を傷つけ浮気した挙句、悪口まで広げた雄二が許せなかった。深い愛情は深い憎しみと変わっていたのだ。

雄二は冷たく突き放されたことによって、ようやく本当に愛しているのは弘子だと気づいた。しかし、時は既に遅すぎた。弘子の憎しみは消えることは無く、泣き続けたベッドの中で、

更なる激しい憎悪となっていたのだ。何事に対しても一途なのだ。とうとうある夜に、雄二は弘子の部屋に忍び込んだ。

何度も訪れ、知り尽くしたアパートだった。

弘子の部屋は二階だが、蔦の絡まる外壁は、雄二には造作も無く這い登ることが出来た。

窓はいつものように、僅かに開いていた。眠る弘子を雄二は黙ってみていた。

あどけなさは残るが、その美しい寝顔に、雄二は戸惑った。

「ごめん」

小さく呟いたが弘子は目を覚まさなかった。雄二は忍び込んだことを後悔した。

弘子とはちゃんと話をしたかったのだ。

気付かれないうちに帰ろうと思い、雄二が踵を返したとき、キャンバスの三脚につまずき、

弘子の描きかけの絵を倒してしまったのだ。物音に気が付き、弘子は目覚めた。

そして部屋に男がいるのに気が付いた。一瞬でパーティーの日の悪夢が、

弘子の脳裏に蘇った。弘子も雄二だとは思ってもいなかった。そして大声を上げたのだ。

雄二は慌てて弘子に馬乗りになり、口を塞いだ。

「待つて。俺だよ、俺」

暗がりには眼が慣れた弘子の目に、雄二の顔が浮かび上がった。

「声、出さない？」

弘子は頷いた。雄二は安心したように、ゆっくりと弘子の口から手を離れた。

「何しているの」

しかし、弘子の怒りは収まらなかった。

「ごめん、話がしたかった」

照れくさそうな雄二の態度に、弘子は何の魅力も感じなくなっていた。

「こんな夜中に？冗談じゃないわ。散々私を馬鹿にしたのに、今さら何を話すの？」

弘子の怒りは、自分にも向けられた。こんな男に全てを捧げたのかと思うと、

口惜しさが次から次へと湧き起こってきた。

「俺が馬鹿だった。弘子。愛しているのはお前だけだ。許してくれ」  
雄二の言葉は、遠い空の彼方へ消えて行った。それほど、信じられなくなっていた。

「雄二への愛はもうなくなっただわ。あるのは憎しみだけよ」

弘子はきっぱりと答えた。

「そんなこと言わずに、許してくれよ」

すがり付くような雄二の態度は、弘子の怒りのバロメータを、

一気に最高点にまで押し上げた。

「もう帰って。二度と顔も見たくないわ。私には近づかないで」

弘子の捨て台詞に、雄二の怒りも爆発した。

わなわなと震えだし、なにやら呟いていたと思ったら、いきなり叫んだ。

「ちきしょう」

雄二は台所に走ると、包丁を持ち出した。その後、雄二が何を言ったのか、

自分が何を叫んだのか、弘子には記憶がなかった。そして気づいた時には、

弘子は血を流し苦しみもがいていた。首筋から暖かい液体が流れ出し、

弘子の胸を真赤に染めた。息も出来ない。弘子の喉は、ごぼごぼと音を立てるだけだ。

雄二の振り回した包丁が、弘子の首を直撃したのだ。

雄二は恐ろしさのあまり窓から逃げ出した。逃げ出す雄二の後姿を見た後は、

弘子は自分の屍をぼんやりと上空から見つめていた。妙に客観的に思えた。

夢のように……。やがて弘子は完全に意識を失った。

翌日、弘子が意識を取り戻したのは、講義の最中だった。

いつ大学に来たのかさえ、弘子は覚えていなかった。長く休んだせいもあり、

皆よそよしかった。誰一人として弘子に話しかけないのである。

講義の後に話しかけても、返事すらしてもらえなかった。

一番仲の良かった美子までもが、弘子を見捨てた。

その理由が分かったのは、その日最後の講義が終了したときだった。

無視はされてもなんとなく皆から離れなれなかった弘子の耳に、

ざわめきと共に驚愕の音が響いた。

「うそー、弘子死んだの？」

「今警察が来ているわ、雄二が呼ばれたみたい」

恵美の知らせに、いきなり美子は泣き出した。

「弘子！どうしてよ。どうして死んだの？」

恵美は泣き崩れる美子を、しっかりと抱きかかえていた。

そんな光景を見ながらも、弘子には自分の事だと思えなかった。

「弘子って誰よ？私？だって私はここのいるじゃない」

その弘子の声は、誰にも届いてはいなかった。

「うそ！うそよ！でたらめよ！」

何度弘子が叫んでも、振り返る者さえいなかった。

## 2章（1）

その時弘子は突然、昨夜の出来事を思い出した。雄二がアパートに忍び込み、

口論の拳句包丁を取り出し振りますうちに私を刺した。

弘子は自分の屍を見つめる姿まで、鮮明に思い出した。

弘子が夢だと思っていたことは、現実に起こっていたのだ。

次の瞬間、弘子はアパートに戻っていた。

アパートには多くの警官が詰めかけ、現場検証の最中だった。

ベッドの脇にはシーツを被って誰かが寝ていた。

しかし、そのシーツは真赤に染まっていたのだ。

シーツの下から突き出た足は、見慣れた弘子の足だった。

「あれが私？わたしなの？」

弘子は思わず近くの警官に訪ねた。

「ねえ、答えて」

腕を掴もうとした弘子の手は、無情にも警官をすりりと通り抜けた。

弘子は呆然と自分の手を見つめた。その手は白く発光し微かに透け

て見えていた。

実体など微塵も感じられなかった。

「どう、これで分かった？」

不意に見慣れぬ女性が隣に現れた。

その女性は光輝いているようにも見え、発する光はとても柔らかく

暖かく感じた。

「貴方は誰？」

弘子は咄嗟に尋ねた。

「貴方の遠い親戚。そんな所かしら」

それから弘子に向かい話を続けた。弘子は訳が分からずに黙って聞いている。

「昨夜のことは覚えているの？」

弘子は頷いた。

「その後のことは？」

「その後？」

「そう、私とはこれで二度目なのよ」

「えっ」

「覚えてないのね」

弘子は頷くしかなかった。事実、何も覚えていないのである。

「私は貴方を迎えに来たの」

「迎えに？」

弘子には話の意味が見えなかった。

「天国への道案内よ」

弘子は、その時初めてその女性に小さな羽根が生えていることに気が付いた。

「じゃあ、天使なの」

「分かりやすく言えば、そうね。でも貴方は一緒に行きたがらなかったの。」

まだ理解してなかったのね」

その理解とは、自分が死んだと言う事だと、弘子は思った。

しかし、驚きも恐怖も無かった。

何故かは分からないが、この女性と話していると、心が休まるのだ。

「だから、貴方を大学に行かせたのよ」

「私に理解させる為？」

「そうよ、残念だけど。貴方は死んだの、ここにいてはいけないわ」  
その顔は笑ってはいるが、目は悲しみに溢れていた。

「何故、ここにいては駄目なの」

「もうここは、貴方の居場所ではないから。ね、一緒に行きましょう」

弘子はシートに包まった自分を見つめ、頷くしかなかった。

その時は、一緒に行かなくては駄目だと思ったのだ。

「一つだけ質問してもいいですか」

ただ、気がかりなことは残った。

「もちろんいいわよ」

「雄二はどうなるの」

弘子は雄二が罪を償い、更生することを願ったのだ。

「答えを聞きたい？」

「聞きたいわ」

「ショックを受けるかもよ」

女性の目の悲しみは色濃くなった。でも、どうしても聞きたかった。こんなことになってしまったが、今では雄二に恨みもなく、雄二の今後が心配だったのだ。

「それでも聞きたいの」

弘子の答えに、女性はしばらく考えてから答えた。

「彼は釈放されるわ」

「何故？」

弘子は驚いた。人を殺してお咎めを受けないことなど有り得ない。そう思ったからだだった。

「アリバイがあつたの。もちろん嘘だけどね。彼の浮気相手が口裏を合わせ、

証拠不十分で釈放されるの」

「嘘よ！彼は正直に答えないの？」

弘子には、女性の言葉が信じられなかった。

「答えないわ。『知らない』の一点張りで、警察も困っていたわ、でも決めるの証拠が無いの」

「だって包丁を持っていたのは彼よ」

「そうね。でも貴方たちが付き合っていたのは皆知っているわ。彼は貴方の部屋で、

料理を作ったと言っているの、だから指紋があつても可笑しくない、とね。

しかも、貴方の悪口を広めたことも認めた上で、何故、今更殺す必要がある、



と逆に警察を攻めるわ」

弘子は啞然とした。殺された後にもここまで馬鹿にされるとは……。穏やかだった弘子の顔が徐々に変わり始めた。

「それで彼は釈放されるのね。何食わぬ顔で」

弘子の顔は夜叉に変貌していた。髪は逆立ち、目は吊り上り、瞳は怒りに燃えていた。

「だから話したくなかったの。もう一緒には行けないみたいね」

悲しそうな目は、今では女性の顔の隅々まで広がっていった。

「ごめんなさい。でも、雄二は許せない。絶対に許せない」

「いえ、私には分かっていたわ、裁くのは貴方だって」

そして一人の男を弘子に紹介した。

見るからに不気味な男は、いつの間にか弘子の後ろに立っていた。頭からフードをすっぽりと被り、顔は見えぬが目だけは、暗闇の中で金色に光り、

じつと弘子を見つめていた。

「ここにいる間は、彼が色々と教えてくれるわ。ここは特別な世界なの。」

人間界にも霊界にも接する場所なの。同時に特別な力を持てる場所でもあるわ。

彼が全て教えてくれる。後は貴方が無事に使命を果たし、霊界に、そして私の元に来ることを願って待つわ」

そして女性は音もなく消えて行った。残された男は、邪悪な存在その者だった。

「まずは様々な能力を身に付けないと駄目だ。今のお前では彼に指一本触れることすら、

出来ない。このままでは復習は成し遂げられないのだ」

邪悪な存在だと分かっている、今の弘子も邪悪な存在だった。恨みを晴らす悪霊である。

美しかった弘子の顔は、この時から邪悪な悪霊の顔へと変貌した。

弘子はまず、物に触ることから教えられた。コップを持ち上げた  
り、

ドアを開けたりするためには重要な能力だ。これが出来なければ、  
復讐は諦めるとまで言われたが、元々一途。悪く言って猪突猛進の  
弘子には、

思いのほかたやすく感じられた。はじめは何を掴もうとしても、手  
がすり抜けるのだが、

あつという間にコップを持ち上げ、壁に投げつけ割ることが出来る  
ようになった。

「優秀だな」

邪悪な存在は弘子の上達ぶりに感心した。怨念や執着心、復讐心が  
強いほど、

上達は早いらしい。

「その調子でどんどん行くぞ」

やがて弘子は、様々な能力を会得していった。人に憑依する術。一  
瞬で移動する術。

夢に入り込む術など、人間を恐怖に陥れる様々な術を身に付けて行  
った。

そして、雄二への復習の機会を虎視眈々と窺っていた。雄二は生き  
た人間である。

いくら弘子が色々な能力をマスターしても、簡単にはいかない。実  
体のない靈魂だからだ。

遂行するには綿密な計画が必要だった。しかし、邪悪な存在は、手  
助けしない。

個人の復讐には、手出ししないそうだ。もしも邪悪な存在に助けを  
求め、

邪悪な存在が手をかせば、弘子は二度と天界には入れなくなる。

そうなれば、行き着く先は地獄しかない。

人間界と霊界の狭間、そのまた狭間の暗い底に叩き落とされるのだ。  
そうなれば、生まれ変わりも二度とはない。

永遠に暗闇を彷徨い続け、完全に邪悪な存在となるのだ。

弘子は自分の力だけで復讐することにした。

復讐のためにはどんな犠牲も厭わないと思っていたが、

どうしても迎えに来た女性ともう一度会いたかったのだ。

その為には、一人で復讐しなければならない。弘子は綿密な計画を立案した。

しかし、計画実行には協力者が必要だった。しかも生きた人間の協力者が……。

## 2章(2)

美奈子は正直なところ恐怖を感じていた。

雄二は相変わらず私に乗ると、自分勝手に果てるだけだったが、そんな時いつも何者かの視線を感じるのだ。

「ねえ、雄二。私、なんだか怖いの」

早々に背中を向ける雄二に、美奈子は話しかけた。

「何が」

雄二は煙草に火をつけ答えた。

「なんだか分からないけど、誰かに見られているように感じるのよ」

「気のせいさ。周りを見るよ。誰もいないよ。もしかしたらあのポスターかもね」

雄二はロックバンドのポスターを指差した。

「もう、からかって」

弘子の死からは既に半年が過ぎていた。雄二も美奈子もその事を忘れていた。

と言うよりも必死に忘れようと努力したのだ。

はじめは雄二も、何度も弘子の夢にうなされ目を覚ました。

美奈子も嘘の証言の後、悪夢に悩まされていた。

しかし、二ヶ月、三ヶ月と過ぎるうちに、罪の意識は薄れ、

悪夢に悩まされることはなくなった。ところが、美奈子は最近またうなされ始め、

目に見えぬ何者かに恐怖を感じていた。

雄二と一緒にいると、その気配は強まり、見つめられているように感じるのだ。

事件の後、雄二は自主的に退学した。弘子の友人たちから常に白い目で見られ、

学園内でも不穏な噂が流れ、とても大学を続ける勇気は、持ち合わせていなかった。

今は建設現場で働く作業員である。

美奈子も雄二に続くように退学し、ホステスとして水商売の道に入った。荒れた生活である。勤務時間の違いから、二人の時間は限られた。しかし、喧嘩が絶えなくなっても、

共通の秘密を持つ二人は、決して離れようとはしなかった。

雄二は帰宅すると、直ぐに美奈子を抱いた。美奈子はこれから仕事に行くのだ。

その僅かな時間が、二人の唯一の時間だった。

美奈子は簡単に下半身だけにシャワーをかけ、雄二の匂いを消した。雄二はインスタントラーメンを食べながら、テレビを見ている。

美奈子は化粧をしながら雄二に尋ねた。

「今日は迎えに来てくれるの」

「駄目だ、明日は早い。明日は現場が遠い。五時には家を出なきゃ」

美奈子の仕事は二時までだ。翌日が休日や、出勤時間が遅いとき、雄二はまめに美奈子を迎えに行った。

「分かった。タクシーで帰ってくるわね」

そう言って美奈子は店に向かった。雄二はラーメンを食べ終わるとうとうと眠りに付いた。美奈子の店は繁盛していた。俗に言うピンクキャバレーで、美奈子は人気者だった。

店の中では一番若く、スタイルがいいのである。指名に次ぐ氏名で美奈子は、

毎日くたくたに疲れていた。今日は世間一般では給料日に当たる。

店はいつもに増して繁盛していた。十二時を過ぎた頃には、

美奈子の指名も既に十五本を越えていた。普段の倍近い指名だ。

口は疲れしまりもなく、手の自由も利かなくなっていた。

店長は仕方なく美奈子の早退を認めた。この後の時間は、比較的客户も減るからだった。

普段は同僚と一緒に帰る美奈子も今日は一人タクシーを待っていた。しかし、タクシー乗り場は長蛇の列で、なかなか美奈子の順番にはならなかった。

今日は二十五日。タクシーもかき入れ時だ。美奈子はめまいがしてきた。

かなり疲労が溜まっていたようだ。目に見えぬ恐怖に慄き、眠れぬ日も多かった。

それでも必死に頑張り、家路に着こうとタクシーの列に並んでいたが、

とうとう、美奈子は意識を失いその場で倒れた。

覚えているのは、誰かに名前を呼ばれたことだった。

その後美奈子は病院のベッドで意識を取り戻した。

ベッドの周りのカーテンと、消毒液の匂いが、ここが病院であることを美奈子に教えていた。まだあたりは真っ暗だ。ベッドサイドのテーブルには、美奈子の腕時計が置かれていた。

三時五分。まだ意識ははっきりしない。美奈子と思った。

あれから三時間も経っていないのか、と。

誰か親切な人が、救急車を呼んでくれたに違いないと思っていた。

美奈子は、自分の腕時計をもう一度、目だけで見てから、また眠りに付いた。

翌朝、美奈子は看護師に起こされた。

日は既に昇っていたが、起こされるまで気が付かなかった。看護師は無愛想だ。

挨拶もなく美奈子の脈を取り始めた。

「今、先生が来ますから」

それだけを伝えると、看護師は病室を出て行った。美奈子はその時初めて気が付いた。

体の自由が利かないのだ。よっぽど疲れているのかと思ったが、そうではなかった。

美奈子は拘束されていた。手足を縛られ、ベッドに固定されていたのだ。

「ちょ、ちょっと、どういうこと」

美奈子にはなにが起きているのか理解出来なかった。自分はタクシ

―乗り場で気を失った。

そして気が付いたときには、病院のベッドの上だった。どうして、縛られなければいけないの？美奈子は理解に苦しんだ。ベッドサイドに美奈子の時計はまだある。

しかし、日付を見たとき、美奈子の混乱は極みに達した。

時計の日付は、二十八になっていた。うそよ！昨日は二十五よ！美奈子は叫びたかったが、

声は出ない。その時、口かせがあることにも気が付いた。頭は完全にパニックに陥っていた。担当医が姿を現したとき、美奈子は混乱により意識を失っていた。

「・・・さん。・・・さん、聞こえますか」

美奈子を呼ぶ声に目を開けると、医師が美奈子の顔を覗き込んでいた。

「いいですか、今、口かせと外しますから、騒がないでください。騒げば、

また口かせですよ。分かりましたか」

美奈子は目を見開きしきりに頷いた。

「じゃあ、外します」

医師が口かせを外したとき、パニック状態の美奈子はいきなり叫んでしまった。

「なんでよ。これはなによ。ここはどこよ」

医師は幻滅した様に、またも口かせをはめようとした。美奈子は慌てた。

口かせをされたら話が出来ない。話が出来なければ状況が分からない。

美奈子は必死に首を振り、叫んだ。

「分かったわ。静かにする。だからそれを着けないで」

医師の手が止まった。

「本当ですね。だったら頷くだけにしてください」

美奈子は言われたままに頷いた。医師は口かせを移動式診療テープ

ルに置いた。

「落ち着きましたか？」

美奈子を覗き込み医師は尋ねた。美奈子は頷いた。

「よろしい。では何故ここにいるか理解できますか」

美奈子は首を振った。

「何があつたか覚えていますか？」

またも美奈子は首を振るだけだった。

「では、話して結構です」

医師に言われ、美奈子は恐る恐る聞いた。

「何故、拘束までされているのですか」

「貴方はすごい錯乱状態でした。手が付けられないほどの錯乱で、安全の処置として拘束しました。しかも、狂ったように叫びっぱなしでした。」

覚えていますか？」

「全然記憶にないの」

美奈子は泣きそうになってきた。

「今日は何日ですか」

更に美奈子は尋ねた。

「二十八日ですよ」

美奈子は答えを聞いて、泣き出した。

「嘘よ！今日は二十六日でしょう。ねえ、そう答えて。お願いだから……」

「今日は二十八日です」

医師は冷たく言い放った。

「だって、私は二十五日にタクシー乗り場で気を失ったのよ。昨日のことだわ。」

今日が二十八日のわけはないでしょう」

「貴方はタクシー乗り場から運ばれたものではありませんよ。警官が連れてきたのです」

「警官？何故警官なの？ここはどこ」



「警察病院です」

「えっ」

「貴方は一緒に暮していた男を殺害し、錯乱状態でここに運ばれてきたのです」

担当はカルテを見ながら付け加えた。

「二十七日、午後九時収容、……」

美奈子にその先は聞こえなかった。私が雄二を殺した？いつ？二十七日？

嘘よ！嘘にきまっているわ！

だって今日は二十六日よ……。混乱の極みに達し、美奈子はまたも意識を失った。

美奈子が目覚めると、一人の警官が病室の椅子に座っていた。

美奈子が目覚めたのに気づくと、病室を出て行った。その間美奈子は、警官の動きを、

呆然と目で追っただけだった。直ぐに私服警官が姿を現した。

「大丈夫ですか、分かりますか」

警官の質問にも、美奈子は何の反応も見せなかった。目元は青く落ち窪み、

唇は真っ白に変色し、かさかさに乾いていた。目玉はしきりに動いていたが瞬きもしない。

私服の警官は首を振って、落胆の色を顔に浮かべた。

しかし、美奈子は必死に叫んでいたのだ。ただ、体は自分の物ではないように、

何の反応も起こさない。

「待ってよ、聞いて。これは間違いよ」

美奈子は病室を出て行くこととする警官を飛びとめたが、美奈子の体は、

静かに横たわるだけだった。当然、声などは出てはいなかった。

私の体は私のものではなくなった。

直感でそう思ったとき、美奈子の体に巢食うもう一人の存在が姿を

あらわし、  
美奈子の全てを飲み込んだ。  
同時に美奈子の肉体も、  
全ての活動を  
停止した。

### 3章（1）

二十五日十一時

雄二は久しぶりに夢を見た。弘子の夢だった。

しかもそれは異常なほど現実的で、みだらで卑猥な淫夢だった。

夢の中の弘子は、この上なく美しかった。

そして、裸の雄二にまたがり、全身をくまなく舐めていた。

夢の中の雄二は、弘子のベッドに手足を固定されていた。そのベッドの周りには、

沢山のキャンドルがともり、揺らめく光の中に弘子の裸体がきらめいていた。

弘子は食事中などにも、良くキャンドルを灯していたのだ。

しかし、光の中の弘子は、異様なほどに長い舌を持っていた。

その長い舌が雄二の男根に巻きつき、雄二にこの上も無い快感を与えていた。

全てを吸い取りそんな錯覚さえ覚えた。長い舌の異様な不気味さに驚きながらも、

雄二はその快感に身をゆだねるしかなかった。やがて弘子は雄二の男根を自ら秘部に埋め、

激しく腰を動かし始めた。弘子の膺は激しくうねり、

まるでいくつもの舌がまとわり付くように、雄二の男根を優しく、そして激しく愛撫した。

あまりの快感に、雄二は直ぐに果てた。ところが、雄二の男根は萎えるどころか、

益々いきり立ち、張り裂けんばかりに硬直していた。

弘子はなお腰を動かし続け、雄二は何度自分が果てたのかさえ、分からなくなってきた。

萎えようにも、押し寄せる快感に逆らえず、下半身は別の生き物と

なっていた。

下から見上げる弘子は美しかった。雄二はこのまま死んでも良いとさえ思ったのだ。

その時弘子の顔が変貌した。

「死んでもいいなら、殺してやるよ」

高笑いする弘子の顔は、この世のものではなかった。

それでも、雄二は快感に身をゆだね続け、最後は気を失った。

その時雄二は夢から醒めた。

全身から汗が噴出し、あろうことが、パンツは大量の精液で汚れていた。

「いい年、して……」

雄二は情けなかった。美奈子に放出したばかりか、

弘子の夢でこんなに大量に夢精するとは、雄二は自分に呆れ返った。しかし、今思い出しても、快感といい感触といい、とても夢とは思えないほど現実的だった。雄二はパンツを脱ぎ捨て、シャワーを浴びた。

美奈子が帰るまでにはまだ時間があつた。

シャワーを浴びながら、夢を思い出し、雄二は笑った。

「しかし、弘子の顔、不気味だったな」

頭にシャワーをかけ、シャンプーを始めた時、自分の男根が触られていることに気が付いた。

慌てて目の周りの泡を取り、目をこすりながら見下ろすと、美奈子が雄二の男根を、

いとおしそうに撫ぜていた。

「なんだ、帰ったのか。随分早いな」

美奈子は何も言わなかった。

「おい、服がびしょびしょだぞ」

美奈子は尚も無言で、雄二の男根を摩り続けていた。

「まったく」

雄二が美奈子の脇に手を差し入れて、勢いよく立ち上がらせると、

それは美奈子の顔ではなかった。

「ひ、弘子！」

雄二は思わず叫んだ。だが弘子はただ笑っただけだった。

「そんな、まさか！死んだはずだ」

雄二は焦った。現状を理解しようと思ったが、とても集中できない。目の前で殺したはずの弘子が笑っているのだ。

「これは、夢だ。これは夢だ」

雄二は念仏のように繰り返す、固く目を閉じた。しばらくしてからゆっくりと目を開けると、弘子はまだそこで笑っていた。

「どうしたの」

弘子が口をきいた。その声は紛れもなく弘子の声だ。

雄二はゲンコツで自分の頭を何度も叩いた。

「夢だ！ありえない」

「雄二、何言っているの」

見ると弘子は裸で、体を洗っていた。二人が付き合っていた頃、愛し合った後に二人で入浴した時と、まったく同じに見えた。

しかもそこは、弘子のアパートの浴室そっくり。いいや、弘子のアパートの浴室だった。

弘子の好みのシャンプーが置かれ、二人の揃いの歯ブラシも、プラスチックのコップに仲良く立っていた。

弘子は好んで子供用の練り歯磨きを使っていた。

『甘いから』との理由だが、その子供用の歯磨きまで、歯ブラシと一緒に立っていた。

雄二は訳が分からなかった。

「風呂場で寝たら風邪ひくわよ」

それは以前の優しい弘子に間違いなかった。弘子は一足先に風呂場から出て、

体を拭き始めた。美しい。雄二は心から思った。しかし、雄二は理解しかねていた。

まだ、夢をみているのではと、思えずにいらなかった。

「う、うん」

雄二が湯船から出ると、弘子がタオルを渡してくれた。

「今日は楽しかったね」

弘子が体を拭く雄二に話しかけた。

「えっ」

「もう、どうしたの？映画よ、面白かったわ」

弘子とは何度も映画を見に行った。

「まだ、続きがありそうな終わり方だったわね。続編が出たらまた見たいわ」

雄二は会話の内容から、見に行った映画を思い出した。

『エルム街の悪夢』そうだ。怖がりながらも弘子は真剣に見ていた。その後の食事にも、何度も映画の話をする弘子を、はつきりと思いつ出した。

それは弘子の誕生日。

「ああ、続編が作られるかは、わからないけどね」

雄二は、今までのことが夢では、と思い始めた。弘子は死なずに元気に過ごし、

自分とは仲良く付き合っていると。弘子が用意した寝巻きに着替え、食卓につくと、

おいしそうな料理が並んでいた。弘子は料理も得意だった。

早くに母を亡くし、悲しむ父のために料理を作りたいと、

家政婦から教わったのだと聞かされたことがあった。食卓から食器に至るまで、

そこにあるものすべては、当時の弘子の部屋、そのものだった。

「雄二、プレゼントありがとう」

そこには、雄二が買った店の紙袋があった。弘子の誕生日に、雄二が買ったプレゼント。

それはミッキーのぬいぐるみ。弘子の父は、ぬいぐるみとかには理解を示さず、

弘子の誕生日は、毎年洋服や勉強道具に限られていた。

事典やドレスは、子供の弘子を喜ばせたことを一度もなかった。そんな弘子がおねだりしたのは、ミッキーのぬいぐるみだった。

弘子は紙袋を引き寄せ、ミッキーのぬいぐるみを抱きしめた。

雄二はこれが現実だと思い始めていた。いや、思いたかった。そう思いたいほど、

ここは心地よく、弘子も優しかったのだ。

「ねえ、雄二も抱いてみて、気持ちいいよ」

弘子に差し出されたぬいぐるみを、雄二は照れくさそうに抱きかかえようとした。

そしてその顔を見た時、雄二は恐怖のドン底に叩き落された。

「美奈子……」

## 最終話

「雄二、雄二大丈夫？」

雄二は美奈子に起こされ、目を覚ました。

「うなされてたわよ」

美奈子は出勤したときと同じ服装だった。

「・・・ああ、大丈夫だ。悪い夢を見たようだ。帰ったのか？」

雄二は起き上がり、自分の体を調べた。いつものパジャマだ。パンツも……汚れていない。

全てが夢だったのか？雄二は夢の内容を完全に覚えていた。リアルだ。リアルすぎる……。

「……聞いている？」

美奈子は何か話していたようだ。

「あ、ああ、聞いているよ」

雄二が答えると、パジャマに着替えた美奈子が隣に座り、話を続けた。

「でね、疲れたから早めに上がったの、ちょっと罰金取られるけど、その分以上に稼いできたわ。ナンバーワンの私には、店長も逆らえないわね」

美奈子は笑っていたが、疲れた様子は隠し切れなかった。

「もう寝ろよ。せつかく早退したんだから」

雄二が言くと、美奈子は首を振った。

「雄二が起きたの、久しぶりなもの、ねえ、また愛してくれる？」

美奈子はパジャマのボタンを外し始めた。目つきは普段の美奈子ではなかった。

今までも、そんな目つきを何度か見たことがある。ピンクキャバレイは客が楽しむだけだ。

サービス嬢にストレスが溜まって可笑しくはない。雄二はそのことを理解し、



美奈子の求めにも出来るだけ答えてきた。しかし今日は、とてもそんな気にはなれなかった。夢の記憶が生々しく残っていたからだ。「駄目だ、朝早い。寝かせてくれ」

雄二の言葉は、美奈子には聞こえないようだった。パジャマの上から撫でていた男根を、

いきなりズボンから引つ張り出し、美奈子は口にくわえた。

雄二は快感に身を仰け反らせた。夢の中では何度も果てたが、現実の雄二は思いのほか元気だった。勢い良く持ち上げる鎌首に、美奈子の舌が絡んだ。

思わず声を出しそうになるが、雄二はかろうじて我慢した。

夢で得た快感も雄二の気持ちに拍車をかけたのか、雄二はあつという間に昇天した。

美奈子は放出された全てを飲み込み、全裸になって雄二の前に横たわった。

ゆっくりと両足を開き、雄二に自分の秘部をさらけ出した。

雄二のペニスは既に復活を遂げていた。

激しく脈打ち、天井を見上げながら更なる爆発の時を待っていた。

雄二はゆっくりと美奈子に重なった。雄二が押し入ると、美奈子は反射的に背中を反らせ、

快楽の世界に踏み入った。雄二の動きが早くなり、美奈子は絶頂へと登りつめた。

雄二も同時に果てた。しかし、雄二は離れようとはしなかった。

それどころか、美奈子の中で復活し始め、徐々に強度を高めていった。

美奈子の快感はまだ落ちきってはいない。硬くなった雄二のペニスが脈打つ度に、

快楽の階段を一步一步上り、雄二が一度腰を引いただけで、二度目の絶頂に達した。

その後、何度達したか美奈子は覚えていなかった。

雄二も自分が何度放出したのか解らなかった。

放出しても、放出しても一向に衰える様子はなく、快感だけを求める獣と化していた。

そんな二人が目覚めたのは、翌日、陽も傾きかけた時だった。

「仕事、休んじまった」

煙草に手を伸ばし一本口にくわえたが、マッチが切れていた。

布団は二人の体液でベトベトだった。

「雄二どうしたの、夕べは変だったわ」

「美奈子、お前こそ可笑しかったぞ」

雄二に言われ、美奈子は笑った。

「そうね、二人とも変だったわね。でも最高の気分よ」

雄二はマッチを探しに立ち上がった。足取りはおぼつかない。ふらふらするのだ。

そんな雄二を見て、美奈子はクスクスと笑った。

「私もだるいわ、今日は休もうかしら」

雄二は答えなかった。その目は、今しがたスイッチを入れたテレビに注がれていた。

「美奈子、見てみる」

雄二に促され、美奈子はテレビを見た。雄二が指差したところは、ニュースキャスターの座る、テーブルだった。

その日付は、二十七日、日曜日。美奈子も雄二も驚いた。丸々一日寝ていたことになる。

いや、寝たのは僅かで、丸一日ハメ狂っていたのかも知れない。

どうも体の状況からすると、後者の方が確立は高そうだった。

「ほんとう？信じられない」

美奈子も自分の目を疑った。他のチャンネルに合わせると、良く見るアニメがやっていて。

確かに日曜の夕方、六時過ぎみたいだ。いきなり雄二が大声で笑い出した。

「いいじゃないか、こんなことがあっても」

呆氣にとられていた美奈子も笑い出した。

「そうね、若いんだもの、一日ぐらい何よ」

雄二は布団に戻り、美奈子を抱き寄せ、優しく話した。

「昨日の美奈子は最高だったよ」

「雄二も信じられないくらいに激しかったわ。でもとても幸せな気分」

美奈子も雄二に抱きついた。

「食事の後またどうだい？」

「雄二も好きね。でもそんな雄二も素敵よ」

二人は唇を重ねた。簡単な食事を済ます頃には、二人の興奮は既に高まっていた。

二人はずっと裸のままだった。食事の際も美奈子は雄二のペニスを摩り続け、

雄二は美奈子の乳房を愛撫していた。やがて箸を投げ捨て、二人は激しいキスを交わし、

体液で汚れたままの布団に飛び込んだ。絡み合う手と足。溶け合う肌と肌。

直ぐに絶頂の波が二人を飲み込んだ。しかし、果てることはない。

永遠の快楽に飲み込まれていくようだった。しかし突然、雄二に異変が起きた。

苦しい。息が出来ない。そう思ったとき、美奈子が首を絞めているのに気がついた。

「や、やめろ」

搾り出した声は、美奈子には届かなかった。

美奈子は馬乗りになり、激しく腰を動かし続けていた。

しかし、その手はしっかりと雄二の首に食い込んでいた。

雄二は美奈子の手を掴み、必死に除けようとしたが、異常な力の強さに、

外すことは出来なかった。ところが、雄二はまたも絶頂を迎えようとしていた。

首に食い込む手には、更なる力が加わった。美奈子も絶頂を迎える

のか、  
動きが激しさを増した。と同時に雄二も勢い良く放出した。  
美奈子の動きが止まった。そして、仰け反った美奈子が顔を見せた  
とき、  
雄二の心臓も止まった。消え行く雄二の意識が最後に見たものは、  
雄二にまたがった弘子の顔だった。  
その顔がかすかに笑ったように見えた時、雄二の意識はぷつぷつと  
途切れ、  
二度と陽の光を見ることはなかった。

「終わつたな」

邪悪な存在が弘子に言った。しかし、弘子は答えなかった。

「迎えをよぶか？」

その問いにも、弘子は答えなかった。弘子は、目を見開き息絶えた  
雄二の屍を、

じつと見下ろしていた。雄二の屍は、肉の殆どが削げ落ち、骨と皮  
に成り果てていた。

美奈子はそんな雄二に抱きついたまま、深い眠りに落ちていた。

弘子はじつと見ていたが、やがて髪の毛が逆立ち始め、邪悪な存在  
に振り向いた。

「まだ、終わってはいない」

弘子の目は激しく燃え盛っていた。邪悪な存在は高笑いを上げた。

「いいぞ、お前の好きにするがいい。とことん恨みを晴らすまで、  
好きに暴れろ」

そして弘子の肩に手を置き、一言残して姿を消した。

弘子の恨みの矛先は、友人と思っていた、あのパーティーに誘った  
女に向けられた。

不幸の始まりは、全てあの女の計略だと……。

弘子には、もう面倒な計画など立てる必要はなかった。

あの女が息絶えるまで、苦しみを与え続けるだけだと思った。

しかし簡単に殺すことは考えなかった。如何に長く苦しめられるかが、問題だった。

雄二を無残な姿で殺した今、弘子には恐れるものはなかった。

そして、邪悪な存在が最後に残した言葉を思い起こしていた。

『後はお前一人でやれ、お前は俺より邪悪な存在だ。教えることは何もない』

弘子はここまで変わった自分に驚きもしたが、邪悪な心に支配された弘子には、

復讐は当然の行いだと思った。死して報いを受けるのだと……。

弘子は人間界と霊界の狭間で生きることを選んだのだ。

弘子は自分のアパートに舞い戻った。部屋はそのままだ。誰も借りてはいない。

全ての復讐はここから始めるのだと自分に言い聞かせ、

邪魔な人間を徹底的に苦しめると固く誓った。アパートも弘子を受け入れた。

壁の彫刻は不気味に盛り上がり、アパート全体に蔓が巻き付き、さながらアパート全体が、

一つの生き物のように変貌していった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7961d/>

---

怨情

2010年10月9日07時42分発行